かの嬉しやの場をちらしてさんと叫るゆゑの中と其のほとりて下鴨居の三石町とて
くとまでは中まれ釜が縁で親方やおしふ遊で家が続で川さもでのまゝ
売たのゝき迄て瓶がふちへでも落ちらがあめ細工の嵐のやうに今時分ハふられて居ル
てあらうに此やらか目でふれるすハない祝ひの神酒徳利おらがいつてふれる遊し
てきよふうと仰出んがそうつ引ものコレ此婦六にやうな悪たくとするなな酒がてひく
ハ時節を待此榎本太郎が奢山亭主のまゝき迄今一ツハちろりに香炉寝酒の亭へ
思ひ迄此二品とぬすまれ取付てそきけんだや此目出る酒壺へふんと嘗舐みサイ
たら親方がちろりに香炉をぬすんでおいらとはめるなかんがくほて呑せろよまく
此胥なも奥油の匂ひ引くへて先の本箱大帳顕林言書のすまでもかぶつてえ
よかじやおまいらとむだ口すむとさつほり折ろ向へちまくと先をちゃるひん
供廻り対のならしの其中に一トきハ目立ならうつ首玉の豆絞らばらしと婦う
袖たらいなぞ着よう雪の肌のはゝらち白雪公の姫君昔日の前今日大黒
への宿参詣に供に付てらハ奥家老打蔓巣太夫姫君の御前にあまをとやき

イヤモウ姫君さま是が大黒天の御先振押町の一筋ぐちまでまうちさぞく
めでたいくりばぐめでまませう扇子扇屋でやすんよいさゞんが御座りますがく
宝へ志がろくハお猿を切をかけまし此扇屋とちまする八十昔長者正月元日に吉方参
此折から扇をひろへこハ目出度し中の絵何ぬ申んと拝きてまが俵の色やで俵
ハすゞたいらうたつさる首中にも是ハ米俵之米ハ剣大黒天を祝ひ志う子の
目の元日までおうさ目出度へこんぶ能て目出さんこんさと此仕へ納しハ今此扇や
是ハむかし此揚酒子の日と申せば殿様白雪公への出入の町人甲子屋忠左衛門
当年八十八の賀姫君様へ何をか御ふそくハ何か申られねども戯ハなにより一の
やうせなつで此家の主人とる忠左衛門るきさ身まハ是でも末の守子
寿の餅さし上女祝ひ又忠左衛門老の楽しみ其の倅忠次郎当年
ちやうど廿才をたちハ姫君様の御名の廿日まそ廿日と廿才と二ツ合せ〆ハ四十と
成四ハきをとハ申せども嵐菓子御祝ひ申せば幾万年も四十余人の寿
と御目通り叶ハぬながらも今日親の寿の守餅持参仕此所にて姫君様へ